

新潟県立大学地域連携センターは、 教員の地域貢献活動を積極的に支援しています。

地域連携センターでは、地域貢献活動を公立大学として本学が果たすべき重要な使命の一つと考えています。

本学が地域の課題解決の推進を牽引する機関となるよう、本センターでは、本学の教員のそれぞれの専門性を活かした地域活動を積極的に支援しています。

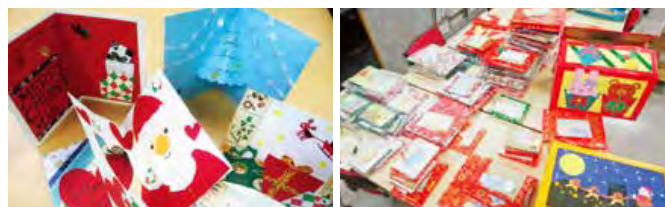


サンタ・プロジェクト・にいがた

【子ども学科】

小池由佳 教授、角張慶子 准教授

クリスマスを病院などで過ごす子どもたちに絵本を贈る、サンタ・プロジェクト・にいがたを平成23年度から行っています。プロジェクトの参加者は、「サンタ」となって、子どもたちの年齢や性別に合わせて本を選び、子どもたちへのメッセージを書いたクリスマスカードを添えてプレゼントします。平成30年度、「NHKニュースおはよう日本」のシリーズ企画『師走の風景』として取り上げられ、多くの人に知っていただくことができました。今後さらにこの活動の輪が広がっていくことを願っています。



新潟水俣病関連情報発信事業

【国際地域学科】 小谷一明 教授

新潟水俣病に関する情報・教訓を広く正しく発信することで、県民の新潟水俣病に対する理解を促すことなどを目的に、県内の団体等が新潟県の補助を受けて様々な企画に取り組み、県の標記事業に平成24年度から参画しています。平成30年度は、この数年この事業に採択されている、本学と新潟大学、新潟医療福祉大学の3大学合同の活動成果発表フォーラムを開催し、多くの皆様に新潟水俣病及び各大学の活動を知っていただく機会を提供することができました。



新潟市ちよいしおプロジェクト

【健康栄養学科】

村山伸子 教授、小島唯助手

新潟市では、減塩に取り組む市民の増加を目的として「ちよいしおプロジェクト」を推進しています。平成30年度はプロジェクトの第4弾として、本学健康栄養学科3年生が新潟市、市内のスーパー、レストランと連携し、野菜たっぷり減塩の外食や中食（お弁当、惣菜）のメニューを開発、各店舗で販売・提供しました。



国際交流ファシリテーター

【国際地域学科】 渡邊松男 教授ほか

県内の小中高生を対象に、現代世界の構造や多文化共生などをテーマにしたワークショップを、本学学生がファシリテーターとして行っています。これは（公財）新潟県国際交流協会の国際理解教育事業の一環で、大学生のサポートのもと、ゲームやクイズなど体験型学習を通じて世界のことを生徒に考えてもらうものです。このワークショップの企画運営を渡邊教授ほか、本学の8名の教員が支援しています。



自殺予防のための ゲートキーパー養成テキスト作成

【子ども学科】 勝又陽太郎 准教授

近年減少傾向にあるものの、依然として毎年150人を超えるほどの自殺者がいる新潟市の現状を鑑み、自殺予防のゲートキーパーを養成することを目的に、勝又准教授は、新潟市らと自殺予防教育プログラム等を内容とするテキストを平成29年度に作成しました。本テキストに記載されたプログラム、資料を研修等で使用することで、参加者が支援に必要な対応力等を身につけることが期待されています。



Community Cooperation Center News

新潟県立大学
University of NIIGATA PREFECTURE

地域連携 センター

ニュース
NEWS 2019 vol.02



特集 (1) 学生の活動



特集 (2) 教員の活動

Contents

- ごあいさつ・地域との連携 P1
- 学生の活動 P2
- 教員の活動 P3~4
- 公開講座開催報告 P5~6



新潟県立大学
University of NIIGATA PREFECTURE

■お問い合わせ先
地域連携センター

平成31年3月発行

TEL 025-368-8225 FAX 025-364-3610 E-mail: unpreco@unii.ac.jp URL http://www.unii.ac.jp/
〒950-8680 新潟県新潟市東区海老ヶ瀬471番地

ごあいさつ ～地域連携センターニュースvol.2の発行によせて～

新潟県立大学の基本理念の一つである「地域性の重視」を実現すべく、地域連携センターでは、開学以来、産学官の連携や学生の地域社会参加の推進、公開講座等による地域住民への生涯学習の場の提供など、積極的に活動に取り組んでまいりました。

ただ、こうした本センターの活動や、本学教員・学生による地域貢献活動については、それまで本学ホームページや大学案内で、その活動の一部を紹介するに留まり、十分に活動を紹介できていなかったことから、平成30年3月、当該年度の活動を主な内容に1冊の冊子にまとめ、「地域連携センターニュースvol.1」として、発行いたしました。地域の方々にはもちろんのこと、入学式やオープンキャンパスなどの機会を利用して、本学学生の保護者や高校生にもお配りし、皆様に関心をもってご覧いただくことができました。

このたび、昨年度に続いて、第2号となる「地域連携センターニュースvol.2」を発行する運びとなりました。本号では、今年度の本学教員・学生の活動と本センター主催の公開講座の内容を中心にご紹介いたします。ご高覧のほどよろしくお願いいたします。



地域との連携



本学は、地域に根ざした公立大学として、共に地域の課題解決に取り組むべく、新潟市を中心とする県内の自治体、大学等と連携を図っています。

新潟市東区自治協議会との連携

新潟市には、中央区、西区、東区など8つの行政区があり、区ごとに市民と行政とが協働することで住民自治の推進を図ることを目的とする、「区自治協議会」と呼ばれる組織があります。東区に位置する本学は、東区自治協議会（以下、東区自治協）と連携（協働）しながら、これまで様々な活動に取り組んできました。

平成30年度の活動としましては、6月、大学付近の公園内にある「じゅんさい池」の清掃作業を本学学生と東区自治協とで行いました。7月には、本学の山中知彦先生の講義の中で、学生と東区自治協とのワークショップが開かれ、東区の特産品である、馬鈴薯（じゃがいも）のPR方法や、発災時に学生として地域でできることなどについて意見交換されました。このワークショップで挙げられた意見をもとに、「東区の馬鈴薯を使った料理アイデアコンテスト」（本学学生8件入賞）や「東区区民ふれあい祭」（入賞レシピの発表など）が開催され、また、10月の本学大学祭では、防災コーナーの設置および地域のハザードマップ等の展示が行われました。



「東区区民ふれあい祭」での、「料理アイデアコンテスト」入賞レシピの発表



「東区区民ふれあい祭」での、馬鈴薯の即売、つかみ取りコーナー



学生と東区自治協議会とのワークショップ



大学祭（蓮花祭）での、防災コーナーの設置

特集
①

学生の活動

本学には、地域の課題解決に積極的に取り組む学生が多くいます。このページでは、近年問題が多く指摘されている空き家について、所属する研究室を中心に、地域住民らと、その対策に取り組む学生の活動を紹介します。

企業と学生と住民による空き家対策活動

GPS（全地球測位システム）と連動したスマートフォンアプリを活用することで、地域における空き家の状況を、効率的かつ多角的にデータ分析できる調査手法を開発いたしました。



民間企業との調査手法に関する意見交換



学生による空き家調査



地域住民との空き家の確認

昨年度、新潟市のがんばるまちなか支援事業として関谷研究室は、天明町の商店街に隣接した築53年の空き家をリノベーションし、研究拠点「T-Base」を開発いたしました。さらに、駅から徒歩圏内にある近隣商業地の天明町には、土地利用の観点から「空き家の商業的利用」が望ましいため、株式会社T-Base-Lifeを設立し、T-Baseの運営と流通しにくい中古住宅（空き家）の市場づくりをめざして活動しております。

こうした活動を通じて本年度は、国土交通省の平成30年度事業「空き家対策の担い手強化・連携モデル事業」を受託し、関谷研究室のゼミ生が「空き家対策の担い手」になるべく調査・開発をとりおこないました。本事業は、『全国の空き家対策を一層加速化させるため、地方公共団体と民間事業者等が連携し、人材育成・相談体制の整備を行う取組や空き家の発生抑制を図り共通課題の解決を図るモデル的な取組』を目的とし、132件の応募のうち58件が採択されました（県内は2件）。

ゼミ生と地域住民を交えた調査の結果、空き家の商業的利用の可能性は、実店舗をもたないクリエイター集団に対し、

・ Popup-Shop（期間限定販売店）として店舗を提供する事業モデルにありました。その一方で、クリエイターには、賃貸料を極力抑えたい経営的事情があり、路線価が高く接道状況の良いエリアへの出店より、接道状況の悪い細街路に面した空き家を好む傾向を見出しました。

・ その結果、ゼミ生たちの研究活動において、空き家に隣接した地域住民への不安の解消、出店への住民理解の促進などが、新たな課題として位置付けられました。さらに、アクセスが悪く資産価値の低い空き家に対し、流通促進につなげる市場をつくるためには、路線価にかかわる評価手法を開発し、ユーザー（起業者）・オーナー（物件所有者）・生活者（地域住民）のコンセンサスを高めるプラットフォーム整備（Webサイトの構築）が不可欠で、民間企業の支援のもと、開発にいそしんでいます。

参加した学生の声

この活動に参加したことで、研究室の関谷先生からだけでなく、様々なプロフェッショナルの方々から、実践的な知識や技術を教わり、一回り成長できた実感しています。卒業後は、地域の課題解決に関わる仕事に携わりたいと考える私にとって、将来に対するモチベーションがさらに高まったことも大きな収穫です。

国際地域学科4年
細川匠

見開き2ページを使って、2名の本学教員の地域活動を紹介し、裏表紙でも他の教員の地域活動を簡単に紹介していますので、そちらも併せてご覧ください。



坂口淳教授の活動紹介

坂口教授は、誰もが暮らしやすい地域づくりを目指して、障がい者と在住外国籍住民に対する活動に取り組んでいます。

新潟市南区における福祉マップづくり

新潟市南区障がい者団体と新潟市南区健康福祉課から相談を受け、南区の福祉マップ作成のお手伝いをしました。福祉マップは主に障がい者用トイレ、障がい者用駐車場の整備状況を地図形式でまとめ、障がい者や障がい者を介助する人たちが安心して街へ出かけられるようにする環境づくりのために全国各地で作られています。また、福祉マップ作成段階で公共施設のバリアフリー状況について詳細に調査するため、地域の整備状況について確認することが出来ます。平成30年3月に南区おでかけ福祉マップを出版することができました。この福祉マップは新潟市で作成した唯一の福祉マップです。

南区おでかけ福祉マップ
<https://goo.gl/D5Uti2>



調査中の様子



車椅子駐車場なのに車の後ろから車椅子が降ろせない駐車場



障がい者用トイレ

医療通訳者の育成

人口減少対策として訪日外国人旅行者による地域経済の活性化が期待されています。しかし、地域の国際化が進む一方で、日本語によるコミュニケーションが困難である外国人観光客、ビジネスマン、在住外国籍住民に対するコミュニケーション支援の整備が全国的に遅れている状況があります。特に長期滞在者にとって関わる可能性が高い行政、医療、教育等の公的サービスでは、言葉によるトラブルが全国各地で発生しています。新潟県内の国際化協会と医療機関及び行政の協力を得て、平成28年から医療通訳者の組織を立ち上げ、新潟市内で英語と中国語の医療通訳者を育成し、新潟県内の病院へ医療通訳者を派遣する仕組みづくりを進めています。

先生からご自身の活動に対して一言

私の専門は「建築環境工学」です。建物や都市の省エネルギー、安全性、快適性に関する研究活動を進めています。ご紹介した活動は、都市生活を豊かにするための方策の一つと捉えています。これらの活動を通じて出会いに恵まれ、地域社会について考えることが出来ました。今後も地域へ出かけていき、大学の学術的知見を広く提供していきたいと考えています。



医療通訳



医療通訳



斉藤美和子教授の活動紹介

長年、「ピアノ」や「音楽表現」などの音楽関連科目を担当し、子どものために創られた「うた」を、どうしたら一人ひとりの心に残るかけがえのない一曲にするかをテーマに、そのアレンジ法などに取り組んできました。実際に学生達と共に保育現場を訪れ、「うたあそび」を展開してきたことが、「おたコン」のステージに活かされています。

おたのしみコンサートの実施

子ども学科のカリキュラムに「音楽表現」や「総合表現」といった科目があります。これらの学びの集大成として、地域子ども達と共に楽しむコンサートを実施してきました。短大時代は9月に、四大になってからは7月に開催し、平成30年で通算24回を数えています。かつては、この通称「おたコン」を高校生の時に見て、これがやりたい!と入学してきた学生もいました。

現代は、大人の事情や予期せぬ災害の多発などで、様々なストレスを抱えた子ども達が多くなってきています。そんな彼らに寄り添い、支援していくことを目指す学生達と共にこの「おたコン」は計画されました。ほんの一時でも「たのしかった!」「うれしかった!」と感じることが、子ども達の今後の人生の支えになることを信じているからです。

保育現場との情報交換

当日、会場に来て下さった子ども達や保護者の方々の「ありがとう!」「よくがんばりましたね」のねぎらいの言葉の他に、現場の保育園からの問い合わせもあります。「おたコン」は、1部に「うたあそび」、2部に「劇あそび」で構成していますが、所属の園で使っていたので○番目の曲の楽譜を提供してほしい、それぞれの曲の展開の工夫を教えてください等の依頼です。また、逆に「子ども達に歌ってほしい(聴いてほしい)曲はありますか?」との問いかけをさせていただき選曲したこともあります。子ども達に馴染みがありながらも一歩先取りした音楽を常に心がけています。

学生達の成長

ほんの90分のステージを創り上げるために、3年生になる年度が明けると7月の本番まで汗と涙の爆走が始まります。一人残らずキャストと裏方の両方を務め、卒業後は様々な現場で、子ども達やあらゆる人々にライトを当てていく立場を経験しています。限られた予算内での衣装・背景・舞台装置の製作。また、本学入学前まで、自分を解放することを抑えてきたか、あるいは忘れてしまったかに見える学生達は、「おたコン」実施の中でそれを思い出し、乳幼児の日常の根幹をもう一度学び直しています。一人ひとりの持つ才能やキャラクターに合わせた脚本作りも自分達の目と耳で確認し工夫を重ねた逸品となっています。

若い学生達の緊張は美しい!こわばっていた面持ちが、緞帳が上がると子ども達の顔が見えると満面の笑顔になる瞬間は神々しいほどです。終演後、緊張感からの解放と達成感で涙におぼれることなのですが、この経験が次世代に寄り添う原動力となることを願っています。

毎回、保育者になる...のではなく、子ども達によって保育者という立場に立たせてもらう...ことを確認するコンサートとなっています。

先生からご自身の活動に対して一言

この活動が始まった25年前は、舞台の基本や舞台用語の全てがわからない学生達でしたが、企画演出方法等のノウハウが引き継がれ、頼もしいアイデアを次々と生み出すようになりました。自分も輝き、周りの人々も輝かせる...この姿勢を忘れずに活躍し続けることを確信しています。



衣装製作

背景製作

大道具製作

様々な才能を持つ学生たち

開演前の円陣

会場の皆さんと

ステージ1部のラスト

熱演

不思議の国のアリス

おもしろかった~!

新潟県立大学では、平成21年の開学以来、地域の皆様を対象にした有意義な公開講座を開催してきました。平成30年度は、雪室貯蔵等の雪の利活用と、それによる本県の活性化について考える講座を開催しました。

雪を活かして新潟をもっとおいしく、もっと元気に



公開講座プログラム

日時	平成30年11月25日(日)	14:00	開会あいさつ
会場	アートホテル新潟駅前 4階 公開講座 / 14:00~17:15【越後東の間】 情報交換会 / 17:30~19:00【レストラン彩巴】(希望者のみ)	14:05~14:45	講話1 雪国のみらいと雪エネルギー 伊藤 親臣
講師	伊藤 親臣 (公益財団法人雪だるま財団 チーフスノーマン) 神山 伸 (新潟県立大学人間生活学部健康栄養学科 准教授) 佐藤 可奈子 (スノーデイズファーム株式会社 代表)	14:50~15:20	講話2 雪利用食品の新たな指標による高付加価値化~新潟県立大学における試み~ 神山 伸
		15:30~16:10	講話3 豪雪地でつくる、地域をつなぐ農業 佐藤 可奈子
		16:20~17:00	登壇者によるパネルディスカッション・質疑応答
		17:00	閉会あいさつ
		17:30~19:00	情報交換会(希望者のみ)

上記3名の講師から、それぞれ新潟の元気につながる雪の利活用等に関する取り組みについて講話をいただきました。

講話1 雪国のみらいと雪エネルギー

【講師】 伊藤 親臣



積雪量が多いと膨大な除雪費が必要となり、交通機関にも影響を及ぼすことから「雪」は疎まれる存在となっています。しかし、昭和30年代までは雪山を雪やフワで覆って夏まで雪を残し、この雪で魚や肉の保冷をはじめさまざまな食品を冷蔵しており、生活に欠かせない大切なものとなっていたことを紹介されました。伊藤先生がチーフスノーマンを務められている雪だるま財団は、地域と都市の交流を目指して多くの事業を展開されており、その事業の一つに雪を利用した「雪冷房」「雪冷蔵・貯蔵」システムの開発があります。雪の冷熱エネルギーは、停電などの影響を受けない「節電」=「雪電」(せつでん)エネルギーで、食品を常に安定して貯蔵することができます。さらに、食品を雪室に貯蔵すると①低温順化・糖化、②鮮度保持、③酸化防止、④分子会合・促進が起こり「おいしさを保てる」、「甘くなる」、「風味が増す」ことがわかってきたと米やジャガイモ、日本酒、コーヒーなどを例に解説してくださいました。また、このような雪室貯蔵による効果を明らかにすることで食品の差別化、ブランド化、高付加価値化が可能になると話されました。現在、雪を使って食品を高付加価値化する技術が盛んになってきており、これが今後の新潟のブランド化につながり、新潟を元気にする経済効果をもたらすことになると話され講話を終えられました。

講話2 雪利用食品の新たな指標による高付加価値化

【講師】 神山 伸 ~新潟県立大学における試み~



雪は、二酸化炭素を排出しない環境にやさしいエネルギー源であることから、近年、さまざまな農作物の雪下・雪中(雪室)貯蔵が試みられるようになってきましたが、品質や食味向上効果が実証されているものは少ない現状にあります。この講話では、神山先生が実証された雪利用による品質向上効果をデータに基づきわかりやすく解説いただきました。まず、雪利用の利点について、冷蔵庫に比べ雪室は、常に安定した低温状態(1~3℃、湿度90%以上)を維持できるため食品の貯蔵庫として優れていることに加え、低温貯蔵によって食品が「低温馴化」し食味が向上する理由を概説されました。その後、具体的な品質向上効果として、①コーヒーは、雪室貯蔵によって刺激臭のアルデヒド類が減少し、コーヒー本来の香りのフラン類等が際立つため、マイルドで風味のよいコーヒーになること、②小麦粉は、雪室貯蔵によって脂質酸化が抑制され、グルテン形成のよいふんわりとしたパンの製造が可能になること、③チーズはやわらかさを維持したまま黄変を防ぐ効果があることについてご紹介いただきました。

さらに、新たな試みとして、雪利用によって単に農作物の品質を向上させるだけではなく、抗酸化作用などの機能性を向上させて高付加価値化することを現在検討されていることについて、雪下人参や唐辛子の研究成果を示しながらお話いただきました。このような新たな高付加価値化商品を開発すれば、新潟の農作物のブランド化に繋がり、新潟を元気にすることができると提案されて講話を終えられました。

講話3 豪雪地でつくる、地域をつなぐ農業

【講師】 佐藤 可奈子



講話③は、スノーデイズファーム株式会社代表の佐藤可奈子氏より、「豪雪地でつくる、地域をつなぐ農業」についてお話いただきました。佐藤氏は、かつて限界集落といわれた十日町市池谷集落の復興に寄与した元祖「移住女子」として、都市と農村をつなぐ活動を進めています。スノーデイズファーム株式会社は、これまで、豪雪地の生き方や哲学を商品という形で体現し、誰かに必要とされることで新たな価値を生み出し、未来につなげたいという想いでものづくりを進めてこられたそうです。たとえば、十日町の地元の慣習である「お茶のみ文化」をもとに発想し「ゆきのひみやげ」と称して誕生したのが、オリジナル「干し芋」です。今後は、雪中貯蔵のプレミアム干し芋の発売を予定しているそうです。さらに、「豪雪地である新潟県十日町市の山あいのちいさな農村で、子どもをまんなかにしたしあわせなはぐみのフィールドをつくる新しい形の農園」として、「雪国こどもおやつ」や、「こども鉄」の開発にも取り組み、「農村まるごとようちえん」の実現を目指しています。雪国の子どもたちが「50年後に見たい風景」をコンセプトに、雪国の農業が生む新たな価値を未来に受け継ぐ活動は、新潟をもっと元気にすることでしょう。

パネルディスカッション

3名の講師による講話の内容を踏まえ、講師と本学地域連携センター運営委員によるパネルディスカッションを行いました。(一部紹介)



(左から)小島委員、植木委員、佐藤氏、神山氏、伊藤氏

- 小島** 本講座テーマ「新潟をもっとおいしく、もっと元気に」を主題として進行する。伊藤氏より新たな取り組みについて情報提供と、講話を踏まえて活動のヒントとなることは?
- 伊藤** これまでよりもっと積極的に雪を活用した、心も体も美しくなる3つの「ビューティープロジェクト」を提言。①インナービューティー=雪室で高機能な食品を開発・貯蔵。②アウトビューティー=雪室を活用した化粧品やせっけんの開発。③メンタルビューティー=雪室と温泉を活用したアイスヨガ、ホットスパ等の心のヒーリング。地域が連携した着地型の体験プログラム。新潟は野菜やお米がおいしいが新潟の人にはあたり前。良さを自覚し付加価値とすることで可能性が広がり同時に経済効果をもたらす。雪を受け入れるだけでなく、もっとアクティブに使うことが必要。
- 佐藤** 地域のおばあちゃんたちが若々しく将来の理想と感じていたが、これがだれかに与えられる価値になるのはよい。現場と研究が繋がるともっと地域は強くなる。つながる=自分たちは何かがわかること。農家も今は自分たちで商品をPRする時代。カギになるのが他との違い。研究が現場と結びついてくると違いを知ることにつながり、その地域の人々の誇りを取り戻すこともできる。それがまた新しい形となり、その場所にきて体感してもらう。ここでしか手に入らないものになる。
- 神山** 野菜の機能性で今注目されるものはアンチエイジングであり、それに関わるのがポリフェノール等の抗酸化成分。雪室貯蔵によって、抗酸化成分、機能性成分がどう変化するかについての研究はまだ少なく、これから発展させていく必要性を感じている。
- 植木** 雪を活かす=雪国を活かし、新たな価値が示される。同時に、佐藤氏のように現場での実践でどう地域をつないでいくかという視点が重要である。地域の農業を通じた実践とそれに派生する子育て支援の取組みは?
- 佐藤** 地域をつなげようと思ったとき、出産をきっかけとして、農業だけでなく将来地域をつなげる立場となる子どもたちを育てていかないと実感。里山のもので舌と感性をはぐむ。子どもおやつの開発ではターゲットはお母さんではない。子育て支援はお母さん向けのものが多いが広がらない。お母さんの周囲が網目状につながり支え合う状況が必要。助け合う文化。これは雪国の地域性にも当てはまるのでは。
- 植木** 3名の講師より最後にコメントを。
- 伊藤** 雪は大変だと思うこともあるが、雪は降ってくる。どう利用できるかととらえる方が雪国にとって明るい可能性を感じる。
- 神山** 雪室を利用した可能性は幅広い。研究と現場が協力してもっと盛り上げていきたい。
- 佐藤** 雪国の暮らしに都会的な暮らしを当てはめようとするのがタイプに感じるのでは。地域の人々がその場所に住むことに誇りを持ってほしい。そこから新しい何かが生まれる。
- 植木** 雪国に誇りを持つ。ふるさとに誇りに持つ。これが新潟をもっとおいしく、もっと元気にすることにつながっていくのでは。

参加者の声(アンケートより)

- 雪がもたらす効果や雪国での暮らし方、生き方を学ぶことができてよかったです。
- 雪を前向きにとらえられる良いきっかけになりました。
- 新潟で生まれ育った私は、この公開講座で雪室の活用など、雪国だからこそできる特別なことを知って嬉しく思いました。また、豊かな新潟の食について学びを深め、追求していけば、もっと色々なことができると感じました。